

幕末明治の写真師列伝 第六十五回 内田九一 その三十

「アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号」（東京朝日新聞社、大正14年）の巻末「寫真史料展覽會出品目録」には、「尾道 密氏所蔵 △湿版ガラス写真 内訳（前略）尾道捌良氏（内田九一氏の令甥）」という記載があり、尾道捌良氏が内田九一の令甥とあるが、その関係は不明。尾道捌良氏、尾道密氏について何かご存じの方がおられればご教授頂きたい。

ここで長崎の内田本家について記すと、内田本家は江戸時代の始めより、代々、長崎で唐船掛宿町附町筆者という役をしていた商家で、このことは、『慶応元年明細分限帳』に、「寛文六年玄祖父より六代当巳年迄二百年相勤與左衛門儀 天保三辰年見習同八酉年筆者跡抱被仰付当巳年迄都合三十四年相勤 唐船掛宿町附町筆者 受用高老貫八百七拾五匁 内田與左衛門 巳四十八歳」「寛文六年高祖父より五代当巳年迄二百年相勤與七郎儀 嘉永四亥年筆者跡抱被仰付当巳年迄十五年相勤 唐船掛宿町附町筆者 受用高老貫九百匁 内田與七郎 巳二十九歳」とあり、この内田與左衛門が、内田本家十一代当主で、長男が内田本家十二代内田與七郎（与七郎）、次男が内田酉之助となる。この内田酉之助が内田九一の門人になった人で、内田九一とは従弟の関係にあたり、内田與左衛門の弟の一人が内田九一の父、内田忠三郎と思われる。内田酉之助は、内田与左衛門とその妻、ミチの次男として、嘉永2年（1849）12月5日に長崎で生まれ、その後長崎を出て東京の内田九一を頼り、浅草代大地の「九一堂万寿」で明治初年から内田九一に従い写真術を学んでいた。

一方、内田酉之助の兄の内田与七郎（内田与左衛門の長男）の方は、東京小石川にて牧場を経営していたという。なぜ牧場なのかは不明ではあるが、日本の牛乳飲用事始めには、陸軍軍医総監の松本良順の大いなる働きがあることから、松本良順の強い勧めがあったのかもしれない。しかし、まだ時代的には早すぎて牛乳を飲む人も少なく、乳牛が病気になったこともあり、与七郎の牧場経営は失敗する。そのため与七郎は明治6年（1873）頃に長崎に一家で帰郷したか、あるいは長男の虎二だけを長崎にいる親戚の吉雄家に預け、与七郎一家は大阪にいる弟の酉之助を頼って行ったように思われる。

このことは渡辺庫輔『崎陽論致』（親和銀行済美会、1964年）所収の「新塾変則入門綴込」（明治元年（1868）より明治10年（1877））を読むと、これには入学年月日、住所、生徒名、年齢、保護者が書かれているが、明治6年（1873）5月6日に「第一大、六小、本興善町七〇 内田厩二 八歳 吉雄圭齋」とあり、同書の「明治六年六月新街私塾生徒名前書」にもこちらは住所、保護者、生徒名、年齢、入学及び退学年月日が書かれているが、「第一

大、七小、万歳町 父内田与七郎 内田寅次 七歳三ヶ月 寅五月」と、内田与七郎の長男、虎二の名があることからそう考えられるのだが、大阪内田家の逸話では、内田与七郎は断髪令の後も永く鬚を切らず、好物のお酒を携えて中之島へ出向いて行き、行き交う船を眺めながら、明治10年（1877）12月5日、失意のうちに大阪で亡くなった。法名は釈浄観信士。与七郎の墓は当初は大阪市内の内田家の墓に葬られたが、この内田家の墓はその後、大阪大空襲で寺が焼失したことや、内田家が宗派を変えたこともあって現在は大阪府豊中市の藤井寺（注ルビ：とうせいじ）にある。

従って、長崎の吉雄圭齋がこの当時、内田虎二の面倒を一時的にみていたように思える。また前掲書の「新塾変則入門綴込」（明治元年（1868）より明治10年（1877））によれば、明治6年5月6日が内田虎二の入学日なので、「明治六年六月新街私塾生徒名前書」に内田虎二の入学及び退学年月日が「寅五月」とあるのは、内田虎二の退学の日付であろう。この寅年は明治11年（1878）に当たることとあることから、内田虎二は明治11年（1878）5月に退学している。

内田与七郎が亡くなった明治10年（1877）12月5日から明治11年（1878）5月の間は、与七郎の妻、スマの方は内田酉之助が面倒をみていたのであろうか。大正2年（1913）9月28日、虎二の母、スマが亡くなり、スマの墓は現在、大阪内田家の菩提寺藤井寺にあることから、内田与七郎が亡くなってスマは自分の実家に帰ったということではないと思われる。従って明治11年（1878）5月に、内田虎二も長崎の吉雄圭齋の元から今度は大阪にいる内田酉之助を頼って行ったことが考えられる。

与七郎とその妻、スマ（旧姓宮崎）との間には、長男、虎二、次男、實之助、三男、齡三、四男、義鑑がいた。このうち次男、實之助は慶応4年（1868）1月18日にまだ幼い頃に亡くなっている。法名は釈實明童子。實之助の墓は大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。

また、三男の齡三は伊藤家へ養子に出されたが、明治13年（1880）8月21日に享年10歳で亡くなっている。法名は釈秀受信士。伊藤齡三の墓も大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。四男の義鑑は、後に母の実家、宮崎家（熊本県天草郡志岐村）へ養子に行っている。宮崎義鑑は古森佐、琴の二女、延と結婚して、長男、静雄、長女、美代子、二女、鶴江、三女、紀子、二男、夭折、三男、義忠と子宝に恵まれた。これらのことは、明治10年（1877）12月5日に内田与七郎が亡くなったことで、与七郎の一家（内田本家）が家族離散の状態になってしまったことを意味すると考えられる。

（森重和雄）